

---

# 私と彼と学園七不思議

秋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私と彼と学園七不思議

### 【Nコード】

N1564L

### 【作者名】

秋

### 【あらすじ】

親友が学園七不思議に関わり、入院してしまった。親友はなにかに取り憑かれたようにやせ細っていく。真実を確かめるために春菜は、生徒会ならなんでも相談に乗ってくれるという話を聞き生徒会室に向かう

そこで彼女を待っていたのは、好き放題に伸びた髪にだらけた格好の「ちよつと」変わった生徒会長だった・・・。

## prologue

その学園にはある噂が存在する。

それを聞いた者の多くはどこにでもあるただの噂だと言っ。

しかし、その噂の真偽を確かめようとした者は皆、口をそろえて同じことを言う。

「悪魔に会った」

昼の暑さが嘘のように冷え切った夏の夜だった。

真夜中に近かったが、月明かりがあるためかなり明るい  
今日は満月だ

真希<sup>まき</sup>、和馬<sup>かずま</sup>、祐介<sup>ゆうすけ</sup>の3人は明和学園<sup>めいわ</sup>に続く坂道を上っていた。

それというのも、真希が、「夏休みの思い出に学園に伝わる七不思議を見つけよう」

と言い出したからだ。

実際、夜の学校に忍び込むのは面白そうだったので和馬と祐介も真希の意見に同意した。

3人は裏門から侵入し、昼間にあけておいた窓から校内に入り込んだ。

明和学園は中高一貫校のため、校舎がなんとも広い。

真希は早くも後悔していた。

夜の学校とはそれだけで十分、畏怖の対象になることを悟った。

和馬と祐介はどんどん先へ進んでいく。

言い出した自分が帰りたいななんて言うわけにはいかない。  
覚悟を決め、2人に続いた。

とりあえず、七不思議に関係しそうな場所を一通り回ることにした。  
保健室や美術室、音楽室、他にも数力所回ったが七不思議の片鱗すら見つけ出すことはできなかった。

「もう、帰ろうぜ」

和馬が言い出した。

祐介も飽きてきた様子だ。

「じゃあ、帰ろっか」と、真希が言ったとき……

突然、ピアノの音が鳴り始めた。

これは……悲愴？

最近、音楽の鑑賞で聴いた気がする……。

いや、今はそんなことどうでも良い。

3人は駆けだした。音楽室は本棟から離れた、特別教室の集まっている、特別棟の最上階だ。

階段を一段飛ばして、駆け上がる。

息を殺し、曲に聴き入る。

すると、急に曲が止まった。

あれ？変だ……。まだ途中なのに……。

そう考えていると、前に居る和馬の体が震えている。

ふと、和馬が見ている方向へ目をやると……。

音楽室の少しだけ開いているドアから、真つ黒な腕が伸びている。

祐介も それ に気づき、目を見開いている。

次の瞬間、手がなくなっただと思ったとき、真希の肩を誰かが掴んだ。

和馬は前、祐介は真横。

それなら今、自分の肩を掴んでいるのは何!?

「お願い……、もっと……」耳元で声がする。

思い切って振り返ってみると、そこには・・・。

## contact

小説本文 七瀬春菜ななせはるなは本棟からすこし離れた第四棟の階段を上っている。

明和学園は本棟、第一棟、第二棟、第三棟、そして第四棟で構成されている。

本棟はHRや職員室が集まっており、第一、第二棟には準備室や特別教室が、第三棟には部室が配置されてる。そして春菜がいる第四棟は生徒会が占領している。

占領している、というのも第四棟は3年前に理由もなく増築されたため生徒会室があるだけで、他の使用の目処がたっていないからだ。

そして、第四棟の4階、生徒会室 ここだ。

とりあえずノックをしてみるが返事はない……。

電気はついているから誰か居ると思うんだけどなあ……。

思い切ってドアをあけると……

ガタツ ガラガラ… バキツ… あれ？

いきなりドアが外れて、私のほうへ倒れてきた。

「お、重い……」

なんとかドアを支えていると、急に笑い声が聞こえてきた。

「まさか今時こんな手にひっかかる奴がいるとは思いませんでしたよ。」

……誰だろっ？

「僕は、生徒会長の綾川だ。」

支えているドアの向こうから自己紹介されても困るんだけど……。

「あの、すみませんが、手伝っていただけますか？」

「んー？嫌だよ？自分のケツは自分でふけて言葉を知らないの？  
いやこの場合自業自得かな？」

……………頭に来た。

パンツ！ ドアを壁にたたきつけ、思い切り自称生徒会長を睨み付けてやった。

そこには好き放題に伸ばした髪に、シルバーフレームの眼鏡の美少年がいた。

「やあ。ひさしぶりの訪問者だ。ゆつくりしていつて。」

今のことは完全スルーだ。こいつは本当に生徒会長なのだろうか？

「で、用件は何？僕も忙しいからさ」

今、久しぶりの訪問者って言ったのはどこのどいつだ！

「あの、生徒会なら大抵のことは相談に乗ってくれると聞いて、来たんですけど……………」

「ふーん、まあ良いけどさ。それより君は誰？」

なんだか、ペースが狂う……。

「私は2年C組の七瀬春菜です。部活は陸上部で生活委員をやります！！！」

「何を怒っているんだい？ストレスたまってる？女の子なんだからそんな顔しちゃ駄目だよ？」

……………なんか面倒になつてきた……。

「君がこの生徒会室にきた理由はなんとなく検討はついているんだ。夏休みに学校に忍び込んで幽霊にあつて引きこもりになった、馬鹿なお友達を助けたいとかだろ？」

「な、なんでわかつたの！？」

「話すと長くなるから要約するけど、僕は勘が良いんだ  
それは要約って言うのかな……………」

まあこの際、そこら辺はどうでも良い。

「それで、その事件の解決して欲しいんです！！！！」

「嫌だ」

え……………???

「どうしてですか？」

「僕が生徒会長だからだよ」

……………わからない。生徒会長なら尚更手伝ってくれるんじゃないだろうか？

「今言っただけ、僕は生徒会長だ。だから学校に不法侵入した人のことなんて興味がないよ。それに生徒会長ってのは意外と忙しいんだよ？」と、いうわけで回れ右して帰れ」



「良かったのか？ 追い返しちゃって」

「良いんだよ。知らなくて良いことなんて世の中にはたくさんある」

「だけどきつとあの子、春菜ちゃんだっけ？ はきつと一人で調べ始めちゃうよ？」

「……………」

「一般生徒の安全を守るのが生徒会長の仕事だろ？ 夏休みに不法侵入した子は君にとってはどうでも良いのだからうけど、あの子はただの友達を助けたいと思っているただの生徒だ。君は見捨てるのかい？」

「わかったよ。僕は生徒会長だ。仕事を放りだすわけにはいかない」

生徒会なんてものに頼った私がバカだった。

こうなったら私、一人で七不思議を解いてみせる。

と、意気込んだのは良いけどなにかから始めよう？

やっぱりまずは七不思議をすべて把握しないと…………。

調べるなら図書室？ それとも聞き込み？

んーもう下校時刻はとっくに過ぎている。

やっぱり図書室に行ってみよう。新聞部の部誌になにか載っているかもしれない。

善は急げだ。

とりあえず、最近の部誌からさかのぼってみよう。



「下校時刻を無視したのは、悪いと思うけど、停電はやり過ぎじゃない？」

「少し、怖がらせたら七不思議の探索を諦めてくれるかと思ったんだよ」

「つまり、邪魔しにきたわけ??？」

なんと意地汚い。こんな奴が生徒会長だなんて、この学園はどうゆう基準で会長を選んでいるんだ!!!

「君が心配だった、なんて言っても信じないんだろうね。」

はあ?なにを言っているんだ。数時間前に会ったときはどうでも良いみたいな態度だったのに……。

「僕はね、これでも生徒会長だ。だから生徒のことは心配だ。いつも気にかけている。」

よくもまあそんな嘘が言える。

「じゃあ事件の解決に協力してくれるの??」

「もちろんさ」

????? さつきは頼んでも手伝ってくれようとはしなかったのに……

なぜ?

「君は自覚していないかもしれないけど、君は生徒なんだ。だから僕は君を守る義務があるんだよ。僕が手伝わなかったせいで大怪我でもされたらこっちが迷惑だ」

……。所詮は自分の保身のためか。でも手伝ってくれと言っのならそのほうが良いに決まっている。

「じゃあよろしくね」

そう言っただけで彼は彼に手を差し出す。

「手伝ってやるから今日はもう帰ってくれ。僕は眠い。」

そして、彼は握手を無視して、一人で帰った。

彼女はまたなにも知らない。

これがただの七不思議ではないことを……

the 1st trick

翌日、とりあえず生徒会室に行ってみることにした。

コン、コン。

ドアをノックしこの間のようにドアが外れないようにゆっくりとあけると…

「遅い」

………人が来るなり遅いとはなんだ！

「私は授業が終わってから、まっすぐにどこにも寄らずに誰とも話さずにここに来たのに遅いはないでしょ……！」

「そんなことはどうでもいいから本題に入ろうか」

なんなんだ！ こいつは。 まったく話がかみ合わない。

「だから前にも言ったけど女の子は笑っていなくちゃ駄目だよ？これだから最近の若い子はー」

「私と会長は同い年だ……！」

なんだか、この男と会話をしているとストレスがたまるな…。

昨日のシリアスな感じはどこへ行った……！！

「じゃあ本題に入るよー。えーと、まずは図書室で昨日の続きをやる。過去にも同じようなことがないか確認した方が良さそうだからね」

ごもつともで。

かくして私たちは図書室で新聞部の部誌の確認を始めた。

開始から早1時間。

手がかり無し。

流石にそろそろ、目が疲れてきた。

「ちょっと休憩にしない？」

そう、横でファイルに目を通してある会長に言った。

「休みたいなら休んでくれ。僕はこんな事件、さつさと解決したいんだ。」

なんで全ての言葉に刺があるんだ。そんなに私が嫌いなのだろうか？ 言い出しっぺの私が休むわけにもいかず、しかたなく作業に戻ると

……

「あつた!!! あつたよ!」

「うるさい。すぐ横に居るんだからそんなにでかい声を出さなくても聞こえるよ」

そこにはこう書かれていた。

明和学園、七不思議誕生!?

ついに明和学園に七不思議が現れた。

夏休みに肝試しをした、複数の生徒が幽霊を見たと言った。

そして彼らは全員が同じことを証言したそうだ。

「悪魔に出会った」

「あ、悪魔?」

驚きから間の抜けた声を出してしまった。

「そうか、悪魔か……」

「なに、一人で納得してるのよ。なにかわかったなら教えてよ」

「君はまだ、知らなくて良いよ」

彼はそう言い放った。

私はついにキレた。

「ふざけないで! 確かに問題を持ち込んだのは私だし、迷惑だったかもしれないけど、それでも手伝ってくれてくれるって言ったんだからなにかわかったんだしたら教えてくれたって良いじゃない!!!」

会長は驚いたようにポカンと口を開けている。

そして急に笑い始めた。

「は、ははは いや、ごめんごめん。まさかそんなに怒るとはね」  
「なにがおかしい。」

「いや、ただ君の怒った顔が見たかっただけなんだ」  
……なんて悪趣味な！

「それで、なにがわかったの？」

「実は、もう七不思議がなんなのかは大体検討はついているんだ。問題なのは手法と犯人」

「ちょ、ちょっと待ってよ。だからなんで、会長は七不思議を知っているの？それに犯人って、誰かがやっていることなの？」  
私はたたみかけるように質問をあげせた。

「質問は一つずつにしてくれ。君は発情期の犬かい？」

……だめだ。怒ったら教えてくれないかもしれないし、きつとまたなにか言うに決まってる。

「少しは学習したみたいだね。お父さんは感激だよ」

「黙れ！！！」

「まず、なんで僕が七不思議を知っているかだけど、それは事前に調べていたからだよ。自分が生徒会長をしている学校でなにか問題が起きたら、とりあえず調べるのが筋だろう？」

つい先日、私の頼みを断つたのはどこの誰だ。

「それできつとなにかあると思って、調べた。ちなみにここにあるファイルはもう全て調べてある」

呆れて怒る気にもなれない。つまり、昨日と今日の苦勞は無駄？

「それで、七不思議はどんなものだったの？」

「前回の七不思議は4年前に起こったそうさ。今回と同じように夏休みに肝試しをしようとして、なにかにあった。そしてその後、学校では七不思議のような怪事件が連続して起きたそうさ。最初は、人魂。2つ目が十三段目の階段、3つ目は図書室の怪、4つ目が鳴らない鐘、5つ目は首つり教室、6つ目は独りでに鳴るピアノ、7つ目が……」

なんで、言わないの？

「7つ目はなに？」

「無いんだ」

え？

「どこにも資料はない。つまり7番目の不思議は存在しない、もしくは語られていない」

それってなにかおかしい……。6番目までちゃんと報告があるのに7番目だけないなんて……

名前だけでもテキストになにか残したほうが格好がつくのに……。

「まあ今日はここまでだ。明日は当時のことを知っていそうな教師に話を聞こう」

なんだが、なにかを隠している気がする。

でもそれがなぜだかはわからない。

彼は謎が多い。

しかし、今は彼に従うしかないだろう。

なんだかんだで、彼は私が調べてもわからなさそうなことを知っていた。

信用はしても良いだろう。

とりあえず、帰る身支度をながら、何気なく外を眺めると、もう真っ暗になっていた。

そして、私はふと、向かいの建物に奇妙なものを見つけた……。

青っぽい色のなにかが揺れている、

それは…… まさか人魂！！？？

「ちよつと！あそこを見て！」

まだ、ファイルを読んでいる会長に叫ぶ。

彼は身を乗り出しそれを確認すると、

「始まったか……」



そう呟いた。

M o r n i n g - e n c o u n t e r

気づいたときにはもう彼は駆けだしていた。

数秒遅れで私も走り出す。

階段を下り、渡り廊下を渡る。

まだ人魂を見つけてからそんなに経っていないのに、さっきまで人魂が存在していた廊下にはなにもなかった。

「どうゆうこと??？」

私はひたすらに困惑していた。

さっき言っていた七不思議の一つが今ここであった!?

それってつまり……

「少し静かにしてくれないかな？」

なんでこうデリカシーがないのかな!!!…… あれ?

図書室のときのようなヘラヘラした顔でなく、なにか怒っているように見えた。

彼は一体どうゆう人間なのだろう?

そんなことを考えていると、私はあるものを見つけた。

「これは……なんだろ??？」

彼も私と同じものを見つけたようだ。

暗くて気づけなかったけど、よくよく見てみると、至る所にそれが落ちている。

真っ黒な粉のようなものが。

「今日は、帰ろう」

彼が言う。

「どうして???まだなにかあるかもしれないよ??もっ少し探そうよ」  
そう提案すると、

「帰るんだ!!!」

驚いた。けっして彼が怒鳴ったからではない。彼の眼がとても哀しい眼をしていたからだ。  
こんな顔もするんだ……。

翌朝、早めに登校し、生徒会室を覗いてみると……

「入りたいなら入れば？」

「キヤーーーーー！！！！」

突然後ろから肩を触られた。

「……そんなに驚かなくても良いと思うんだけどなあ。少し傷つくよ？」

後ろを振り返ってみると、七三分けのいかにも優等生！という風貌の男子がいた。

「ご、ごめんなさい」

「いやいや、こちらこそ驚かしてごめんね」

「すぐ穏和な人だ。この人も生徒会なのかな？」

「ねえ、もしかして、七瀬春菜ちゃん？」

「どうして私の名前を知っているんだろう……」。

黙っていると、七三分けは肯定と受け取ったらしい。

「やっぱりそうか。君、伊吹のお気に入りでしょ？あ、俺は副会長の小林潤こばやし じゆん。」

「よろしくね、春菜ちゃん」

「よ、よ、よろしくお願ひします……」

お気に入り！？ってどうか伊吹って誰？

そんなことを考えていると、ふいに生徒会室のドアが開いた。

「そんなところで立ち話されると迷惑なんだけど？」

会長が本当に迷惑そうに呟く。

「ごめんごめん、伊吹」

えええええ、伊吹って会長のこと！？ 似合わなさすぎる……。

「下の名前で僕を呼ぶな」

いつもより数倍不機嫌そうな顔をする……。

「えーと、あの、その、昨日の話をしにきたんだけど」

この空気に耐えられず、話をそらすことにした。

「ああ、そのことか。今日は教師に聞き込むから。以上。遅刻する前に教室へ行け」

「なによ！そんな言い方しなくても良いじゃない！」

「そうだよ。伊吹、女の子は大切に扱わないと」

小林とかいう副会長も加勢してくれる。

「それは無類の女好きのお前のポリシーだろう？」

え？ 七三分けで優等生顔の女好きって……。いや、確かによくよく観察すると格好いい。

さわやか系かな？

「ほら、春菜ちゃんが誤解しちゃったじゃないかー」

もうどうにでもなれ……

「とりあえず、教室に戻れ！僕は仕事の続きがあるんだ！」

会長は真っ赤な顔をして、ドアを勢いよく閉めた。

可愛いところもあるじゃん。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1564/>

---

私と彼と学園七不思議

2010年10月20日13時39分発行